

## 第6章 先行事例および先行研究に学ぶ

### 1節 全国中高一貫教育校研究大会より 千葉県立中高の事例

2012年11月2～3日、第12回全国中高一貫教育校研究大会が、宮城県仙台二華中学校・高等学校にて行われ、本学院から太田健児・竹内紀幸・佐々木達也の各委員が参加した。「学びをつなげる授業づくり～思考力・判断力・表現力を系統的に身に付けさせる指導法の工夫～」という主題を掲げた同研究大会は、授業研究を中心として多くの点について協議した。紙幅の関係から、ここではすべてを紹介することはせず、本報告書に関連するプロジェクト学習に絞って述べることとする。

併設型中高一貫校の分科会では、報告の一つに千葉県立千葉中高より「千葉中学校における学びをつなげる教育活動」の報告があった。千葉中高はレベルの高いプロジェクト学習で知られ、PBL フェスタの常連校でもあるので、その報告に注目した。

千葉中高では、「学びのリテラシー」「ゼミ」「プロジェクト」という授業を設けており、方法論から具体的な調査・研究までの系統的な探究型学習のカリキュラムを動かしている。さらに、「千葉中アカデミア」と名づけた大規模なPBLプレゼンテーション大会を行っている。同研究大会ではこれらの具体的な進め方の資料もあり、大変参考になった。何より、間違いなく学校をあげたPBLの取り組みの先進事例であり、幸いに何点か質問もできた。

#### 1)ゼミやアカデミアにおける助言者としての教員の配置はどのようにしているか。

——テーマごとに集まった1クラス24名・5クラスの生徒に対し、15名の教員が前半10名・後半10名に分かれてサポートに入っている。最も指導を要するポイントは、テーマを決めるまでの段階と、仕上げの段階である。なぜなら、中学生は論理の飛躍が大きく、わずかの事例から一足飛びに一般化しがちだからである。

#### 2)千葉中高の近隣には千葉大学があり、教育学部ではPBLを研究・推進している研究室もあり、しばしば千葉中高の実践が引き合いに出されることも少なくない。千葉大等周辺の教育・研究機関との連携はどのようになっているか。

——相互連携であり、むしろ大学の研究のために千葉中高が貢献している部分も少なくない。

#### 3)報告の中に、海外異文化学習を実施しており、プロジェクト学習を盛り込もうと計画していることが述べられていた。本校でも海外研修を行っているが、海外でプロジェクト型の学習をどのように展開する計画か。

——これまでの2回の実施の経験から、3回目の海外異文化学習より、プロジェクト型学習を取り入れる予定である。アメリカがフィールドであるが、国内のようなグループ行動は無理なので、見学等は合同で行い、テーマを立てさせ、興味のある生徒たちに探究させる方向で計画している。

千葉中高の実践報告と質疑は本校にとってきわめて示唆に富むものであった。とりわけ探究における系統的な手厚い指導とポイント、海外でのプロジェクト学習のあり方は大いに参考になった。

## 2節 先進校視察より 開智学園・開智中学校高等学校一貫部の事例

プロジェクト型宿泊研修の先進事例を探していたところ、埼玉県にある開智学園・開智中学校高等学校一貫部で、「探究テーマ」と「フィールドワーク」という取り組みがなされていることを知った。いずれも本校で行っている学習に近いものを感じたが、とりわけホームページに掲げられている「フィールドワーク」は本校の形に極めて近い。こういうわけで、11月19日に佐々木達也・佐藤信義両委員が直接訪問してインタビュー調査を行い、参考にする事とした。

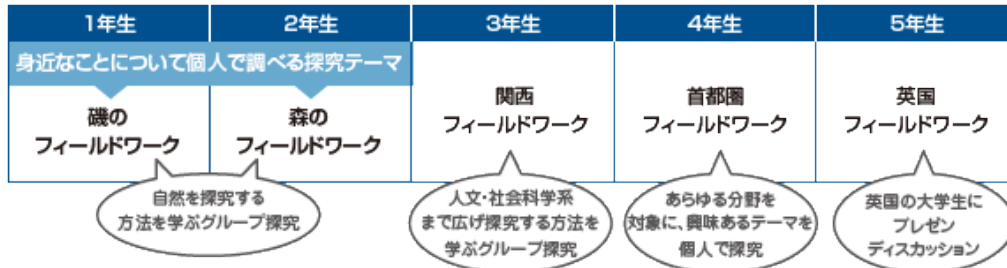


図 開智学園ホームページより<sup>11</sup>

### 1 学校概要

開智学園は、小学校～中学2までの8年制の総合部約800名、中高6年制の一貫部約1700名、高等部約900名からなる学園である。三つの部はそれぞれ別の学校であり、教員組織や生徒会活動、部活動も別々であるが、総合部は中3から一貫部に接続する。

元来高等学校だけであったが、16年前に中学校を開設するに当たり、自ら考える生徒・創造的な発想をする生徒を育てたいと考え、中高一貫教育のコンセプトを「探究テーマ・フィールドワーク」とした。さらに4年前より一貫部に「先端創造クラス」を創設し、「教えない」「自ら学ぶ」「考える」学習を行っており、外部の模擬試験や文科系のコンテスト等で成果を出し始めている。

海外プログラムとの関係で言えば、中学では英語7単位のうち2単位を英会話とし、ネイティブ・スピーカーが5年生でのイギリス・フィールドワークにおけるプレゼンテーションを意識した授業を行っている。このため「ブロークン・イングリッシュで話すのは恥ずかしい」という雰囲気がある程度醸成されている。

### 2 「フィールドワーク」と「探究テーマ」について

#### 1) 「フィールドワーク」

「フィールドワーク」は探究の手法を学ぶ場と位置づけ、次のプロセスが大事にされる。すなわち、

- ①疑問を持つ
- ②今までの知識を総動員して仮説を立てる。仮説は理由・根拠に基づいて立てられねばならない
- ③観察・実験・文献・アンケート等によって仮説を検証する
- ④他者に発表する

中学1・2年生では（生徒たちが取り組みやすい）自然科学から入り、「磯のフィールドワーク」「森のフィールドワーク」を行う。これらには大学院生も加わり、現場で検証の方法を具体的に指導する。3年生の広島・関西フィールドワークでは、教員がテーマのカテゴリーを示し、生徒がグループごとに下位のテーマを決めて、3泊4日のうち1日グループ探究活動を行う。訪問先は自分たちで決め、アポイントメントをとり、質問項目を準備して研修を行う。その準備のためにほぼ半年が費やされる。グルー

<sup>11</sup> [http://www.kaichigakuen.ed.jp/tyuukouikkannbu/02.tankyu\\_hashingatagakushuu/tankyu.htm](http://www.kaichigakuen.ed.jp/tyuukouikkannbu/02.tankyu_hashingatagakushuu/tankyu.htm)

プは似通ったテーマの生徒が集まり、グループとしての探究大テーマを決め、訪問先をディスカッションして決めていく。したがって必ずしも個々人の探究テーマと一致するわけではない。また、3年生になると個人でかなり文献を読めるようになるので、直感的な仮説（予測）ではなく、根拠ある（根拠を明示した）疑問や仮説を立てるよう指導している。

4年生では、丸一日使った首都圏での個人探究を行う。これはまったくの個人フィールドワークであり、個人のテーマに基づいて訪問先を決め、アポイントメントを取り、移動手段を講じ、実行する。4年での個人探究は最終的に2月の発表会において、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。

5年生での英国フィールドワークで行う英語のプレゼンテーションは、上述の4年生でまとめた探究内容を英訳し、プレゼンテーションできるようにしたもので、全員の生徒がこれを行う。英国フィールドワークは、ロンドン郊外のブルネル大学の学生寮に宿泊し、大英博物館等を全員で見学しながら、上述のプレゼンテーションを行う。

各6名の生徒グループに対し1名のイギリス人大学生が活動を共にする。生徒の英語によるプレゼンテーションは、この7人のグループでイギリス人学生に対して行い、英語で質疑・応答する。語学力上の問題や安全上の課題から、イギリスでグループごとの探究活動（自主研修）はできない。また、生徒の英語力にも差があるので、各グループに1～2名は通訳可能なレベルの生徒を配置する工夫を行っている。

## 2) 個人探究について

入学前説明会で方法論と事例をまとめた小冊子を配り、何の説明もなしに春休みに個人探究をさせ、4月に発表会をさせる。夏休みに方法論（問いを立てること、仮説を立てること、検証の方法とまとめ方）を説明し、夏休みの課題として取り組ませ、9月の開智発表会でポスターセッションを行わせる。2月に探究発表会があり、2年生全員がポスター発表する（1年生は先輩の取り組みを見る）。このために2年生は1年間かけて探究を行う。

3年生になると広島・関西フィールドワークの準備にかなり忙殺され、個人探究はあまり進展しない。

2月の探究発表会で4年生全員がパワーポイントを使って個人探究の発表を行う。全員のプレゼンテーションはすでに述べたように、英国フィールドワークでも行う。

総合学習の時間内では十分な活動時間を確保することができないので、LHRや放課後の時間を活用して各自探究テーマに取り組ませ、指導している。

指導体制としては、教員一人当たり20名の生徒を担当する。夏休み前に担当の生徒全員と個別面談を行い、テーマの立て方、探究の進め方について指導する。夏休み明けに再度個別面談を行って指導する。また、校務分掌に「探究テーマ室」を設け、各学年に「探究担当」教員を配置していることである。探究テーマ室の役割は、探究関連の行事を動かすことと、その見直しを行うこと、学習や仕掛けのためのプリント・ワークシートを作成・配布するなど、探究テーマの全体を統括している。

開智学園中高・一貫部の訪問は、具体的な指導の様子を知ることができたという点で、非常に収穫の多いものとなった。特に千葉中高とも共通する探究指導体制と指導のポイント、系統的な方法論の指導のありかた、指導および研究の組織は大いに参考となった。